

第8日

平成22年9月8日（水）

午後2時8分再開

○議長（柴田裕隆君） 休憩前に引き続き会議を開き、一般質問を続行いたします。

次に、1番北原勝議員の質問を許可します。1番北原勝議員。

（1番北原 勝君登壇）

○1番（北原 勝君） 皆様、こんにちは。1番議員の北原勝でございます。今回で一般質問が2回目となります。前回の一般質問においては、教育というテーマで、細目としてスポーツ教育、学問教育ということで行いました。その際、時間的制約の中で、教育という大きなテーマを持ってきたということもあり、自分なりに納得のいく一般質問としては程遠いものだったのかなと思います。そこで、今回も継続した一般質問とさせていただきたいと思います。

さて、私は議員になり5カ月が過ぎようとしています。その間、さまざまな活動に携わりながら勉強もさせていただきました。特に、武雄市での視察ですが、桑野議員の御世話により実現したわけですが、この視察について印象深かったために、お話しさせていただきたいと思います。

まず、最初に武雄市の概略としてですが、人口5万1,485人と、歳入206億円、そして歳出199億円と、そういった概略ですが、つまり朝倉市と概略等は似通っております。このような市の中で、テレビでも放映がなされているように、市役所の中が活気づいていました。というのも、武雄市は前向きな発想により営業課、また少子化対策としておむすび課などがあります。新たな産業を役所職員がみずから発見、開拓、そして製品化をして、武雄市のブランドとして積極的に営業を行い、産業発展に貢献していることであります。このことは、高度成長期における官僚の手法に近いような気がします。

「官僚たちの夏」という本があり、これは通産官僚が産業界と協調して一緒に新たな産業を生み出し、戦後の日本を支えて行く姿が書かれています。これは、技術と知識の融合であり、このことで新たな産業を生み出す原動力となったのです。まさしく、温故知新であり、市民と役所職員が強調し、新たな産業を生み出すべく努力している姿だと思います。

朝倉市においても、新たな産業開拓のため、既存の考えにとらわれることなく、さまざまな協調を行うことで朝倉市の発展にならないかなと、私なりに考えさせられた1日となりました。今後も、私もこれを機会に、朝倉市のために何らかのアイデアをつくり出し、どんどん提案していきたいと思います。以上が、武雄市視察における感想といたしますか、印象でありました。

それでは、本題に入らせていただきたいと思います。きょうは、前回の一般質問の第二弾として質問を組み立ててまいりました。執行部の方、どうぞよろしく願いいたします。

続きは、質問席から質問させていただきます。

(1 番北原 勝君降壇)

○議長(柴田裕隆君) 1 番北原勝議員。

○1 番(北原 勝君) では、通告書に従い質問させていただきます。まず、前回市長の答弁でありました、県で行われているタレント発掘事業についてお尋ねいたします。朝倉市において、このシステムの活用実績はいかがですか。また、具体的にどの種目ということがわかればお願いいたします。さらに、この広報活動についてどのようになさっているのか答弁をお願いいたします。

○議長(柴田裕隆君) 教育部長。

○教育部長(藤本具彦君) 議員御質問の福岡県タレント発掘事業でございますけれども、県内の優れた素質を持った子どもたちを発掘し、一貫した指導システムで強化育成していくことで、オリンピックや世界選手権など、国際級の優秀選手や優秀チームを排出することを目的としまして、平成16年度から実施されている事業でございます。昨年度の参加人員等につきましては、総数で約2万1,000人、3次までの選考を経まして、最終的には50名程度まで絞り込まれていると、400人に1人という割合でございます。受講生は中学3年生までということでございます。

朝倉市のタレント発掘事業に関する状況でございますけれども、朝倉市の児童生徒は、昨年度、小学生17名、中学生2名が応募いたしまして、小学生1名が選考に残っているという状況でございます。で、現在、継続して受講している中学1年生と合わせまして、2名が受講しているという状況でございます。

で、どういった、発掘事業に参加されているかということですが、事業の関係でございますが、朝倉市では本事業の修了生は2名で、1名は中学3年のときのバレーボールの選手でございます。県の選抜選手に選ばれた生徒さんがおられます。また、別な、現在高校生ですけれども、競技種目を変更して、高校のスポーツの特待生として活躍をいただいているという状況でございます。

で、これらの、次には活動状況ということでございますが、毎年6月に小学校4年生から中学1年生のすべての児童生徒を対象にいたしまして、学校を通じてリーフレットを配るとともに、ポスター等の掲示をいたしまして、参加者を募集しているというふうな状況でございます。で、その後につきましては、保護者の方が直接対応されるというふうな状況でございます。以上でございます。

○議長(柴田裕隆君) 1 番北原勝議員。

○1 番(北原 勝君) ありがとうございます。朝倉市においては、前回の一般質問におきましても確認したとおり、大変スポーツが盛んな町であります。ただ、現状においては、このタレント発掘事業というのは活用実績が乏しい感は否めないという状況であります。というのも、これは選抜基準がかなりハードルの高いものとなっているからではないかと

思われます。また、広報活動については、今後現場の指導者への伝達とか、あるいは体育協会へも伝達をお願いしたいなというふうに思います。

私のほうから、タレント事業について確認したところ、タレント発掘事業は、平成16年、16年度初の、日本初の事業として創設されたそうです。この事業の特徴は、選抜する際に、特定のスポーツ種目を想定しない、種目非特化型の発掘だということであります。対象は、小学5年生から中学3年生で、育成期間中はさまざまなスポーツを体験し、最終的に自分に合ったスポーツ種目を選択し、高校生から専門的に取り組むという特徴のものだそうです。

具体的に何を行っているのか説明させていただくと、小中学生、5年生から中学3年生までを対象とし、体力検査を行い、一定の基準に満たした人について、今後どのような種目が本人に合致しているかどうかというアドバイスをするに過ぎず、具体的な特定のスポーツに対して行っているものではないのであります。

以上の状況のため、スポーツ指導者からは「それじゃあおそ過ぎる」という否定的なコメントもあるそうです。これでは、一流の選手の発掘は困難であり、せつかくの人材が生かせなくなるのではと思います。私のイメージするものとしては、やはり前回の提案のとおり、一流選手をつくり上げてほしいということです。ゴルフでもよい、野球でもよい、剣道でもよい、バレーボールでもいいです。何でもスポーツに関することならいいので、積極的に人材育成を行ってほしいと思います。

既に、国レベルである文科省においては、8月27日、また8月31日の読売新聞にて「スポーツ立国戦略」を公表したとの記事がありました。この記事について説明させていただきますと、基本的な考え方をもとに、1つ、ライフステージに応じたスポーツ機会の創造、2つ、世界で競い合うトップアスリートの育成・強化、3つ、スポーツ界の連携・協働による「好循環」の創出、4つ、スポーツ界における透明性や公平・公正性の向上、5つ、社会全体でスポーツを支える基盤の整備とあります。また、地域の振興策として、全国の拠点クラブに元トップ選手を指導者として配置する仕組みを提案されています。

当該スポーツ立国戦略において中心的な存在となるものは、総合型地域スポーツクラブということです。これについては、来年度予算において要求し、規模としては54億円だそうです。

そこで、私の、前回の一般質問において、スポーツマンスカラシップの創設について提案させていただきました。前回市長の答弁においては「タレント発掘事業の活用のほうが現実的では」とのことでありましたが、今私が申したように、タレント発掘事業の現状では時流に取り残されてしまいます。よって、当該事業の活用だけでは、朝倉市から一流選手の出現が期待できないのではないかと思います。

ただ、朝倉市において、生涯学習課と体育協会の連携により、東海大学の講師を招き、「競技力向上のためのメンタルトレーニング」という題目で、指導者育成のスポーツ講演

会を開いてくださいました。しかしながら、この講演は今後、せっかくそのような人脈がありながら、朝倉市民への継続的な取り組みがなされるかどうか、まだわからない状況であります。

要するに、朝倉市の独自においてスポーツマンスカラシップの創設により、人材を育成し、当該育成した人材を、国のこのスポーツ立国戦略という土俵にのせ、朝倉市から一流の選手を出すという目標を立ててはいかがでしょうか。仮に、国のスポーツ立国戦略がなくなったとしても、スポーツマンスカラシップという形で、朝倉市の目玉施策として打ち出すことがとても重要なことだと思われまます。

あと、つけ加えですが、6月の一般質問の際の市長の答弁において、朝倉市のスポーツ施設についての答弁がございました。その際「施設の整備というものもあわせて今後真剣に取り組んでいく必要があるかなというふうに思っております」というフレーズがありました。当然、私も施設の整備というものは重要であると考えます。しかしながら、まずは人材育成が大切であり、既存の施設を利用し、必要に応じて施設の整備を考えていただきたい。そうしなければ、箱物行政の温床の一部として利用されかねないということからお願いしたいと思ひます。

要するに、何が言いたいのかと申しますと、私の言わんとする趣旨としましては、箱物よりも人材育成を優先してほしいということであります。ただ、指導者の問題もあることから、既存の施設及び人材を活用し、予算をつけることで積極的な将来への人材投資を行っていただきたいと思ひます。とりあえず、現段階においては、入り口として、この競技力向上のためのメンタルトレーニングの続編をぜひやっていただければと思ひます。

そこで、市長に答弁をお願いしたいと思ひます。今から4点の質問をさせていただきます。まず1つ、既存のタレント発掘事業のあり方についてどうお考えなのか。2つ目に、国のスポーツ立国戦略についてのお考え。3つ目、スポーツマンスカラシップの創設についてのお考え。4つ目、朝倉市におけるスポーツに対しての今後の取り組みについて。具体的な答弁をお願いしたいと思ひます。

○議長（柴田裕隆君） 教育部長。

○教育部長（藤本具彦君） 市長の答弁の前に、担当部局としての考え方を少し述べさせていただきます。

で、まずタレント、今御説明しましたタレント発掘事業につきましては、先ほど御説明しましたように、学校等通じながら一応お知らせしての対応をさせていただいております。で、これは個人、まあ生徒さん方、子どもさん方の自主的な申し込みっていうんですか、応募によりましての事業ということでございますので、そういったお知らせ等については今までどおりさせていただきたいと思ひますし、先ほど御意見をいただきました配付する際の先生、まあスポーツ担当の先生方へのお話とか、体協を通じてのお話というのはできるかというふうに思っておるところでございます。

また、2点目の、スポーツ立国戦略案というのが、ちょっと私ども、今、先ほどちょっと見たばかりで、大変申しわけありませんが、この概要につきましては、ちょっと現段階では十分に承知いたしておりません。申しわけございません。

それと、スカラシップ版の、済みません、助成制度といたしますか、につきましては、やはり、その子どもさん方が持ってあります素質を生かしての人材育成という意味では、そのスポーツだけじゃなくて、その方々それぞれの持ってある素質があると思いますので、そういった全般を含めましての人材育成ちゅうのは大事だろうと思いますし、スポーツを通して大事だろうと思いますので、そういった、まあスカラシップの利用、制度を設けるとかいうことじゃなくして、それは全体的に取り組んでいく必要があるかなというふうに思っているところでございます。

メンタルにつきましては、ちょっと担当課長のほうから説明します。

○議長（柴田裕隆君） 生涯学習課長。

○生涯学習課長（秋穂修實君） 先ほど議員おっしゃいました、競技力向上のためのメンタルトレーニングというのが、先日の8月19日にピーポートの第4、第5学習室、127名入りますが、そこで講演会をしていただいております。結果としまして、参加者が100名、体育協会の21団体の指導者の方々、及びスポーツ少年団の指導者の方々、ほぼ満席状態で非常に好評でございました。その中には、北原議員もスポーツの一指導者として御出席いただいとったと思います。

内容につきましては、これまで朝倉地域の指導者にはなかったような視点からの指導がございまして、本来技術、スポーツ指導者というのはその技術面、スキル面、それから体力、フィジカル面、それ以外にその心が大事だよと、メンタル面が大事だよということ、この日本におけるメンタルトレーニングの第一人者としての大学の教授の御講演ということで、非常に好評でございました。

それで、今後どうするのかというお話ですが、これは今回市の体育協会の予算、限られた予算の中でお招きしたということなんですけど、今後引き続き御要望があれば、体育協会としてもお考えいただきたいというところなんですけど、なかなか予算もありますので、もし仮に有志指導者、スポーツ少年団でありますとか、体育協会の、体協の加盟団体の方々が有志でシリーズで呼びたいということであれば、私ども事務局のほうとしても努力をしてみたいと思っております。

それから、それ以外の指導者の育成についての育成事業なんですけど、市、それから北筑後管内、県段階での各種の研修会も当然開催されております。先ほどの東海大の教授も、2年に1度ほどは県のアクションのほうで指導されているということを知っております。それから、スポーツ少年団につきましては、認定指導者の講習会、それから指導者協議会、そういったものを開催しておりますので、御期待にこたえられるような充実した講演会をこれからも計画していきたいと思っております。以上です。

○議長（柴田裕隆君） 市長。

○市長（森田俊介君） 4点の御質問ございました。

まず、県が実施しておりますタレント発掘事業のあり方についてどう思うかということでもあります。これは、県で行われている事業でありますので、私にとにかく言うべき筋じゃございません。ただ、1点、北原議員と多少意見が異なるところがございまして。あれは、その、専門的にこっちサイドからやってないんだからだめだというふうな論点だったと思います。要するに、中学生までいろんなスポーツの適正を見て、いろんな適正を見て、それからどの種目と決めるというのが県のタレント発掘事業の形であります。要するに、その前に基礎的な体力ですとか、基礎的なものを見て、その中で選考して、それからそれぞれの向いたスポーツにつくと。それでは時期がおそ過ぎるんじゃないかという、たしかそういった趣旨であったように思います。

考え方でありますけれども、例えば、欧米の学校は、スポーツについてはシーズン制を取っております。ですから、ちっちゃいときから同じスポーツばかり、ずっとやってくというのは、意外と日本とか、例えば旧社会主義国の国家でスポーツ選手を養成しようというところはそのような傾向がありますけれども、それ以前に、私ども1つの考え方として、スポーツというのは、子どもの体力を養うための、まずそこが出発点だということです。その中から優れた、資質の優れた人たちが、もちろんこれは、そういった事業のところの手助けをやらにやいかんですけれども、そういう人たちがやはり日本のトップ選手になって世界に出て行くという形であろうかと思えます。初めから、ちっちゃいときから「お前はオリンピック選手、オリンピックに行くために鍛えておるんだ」というふうなことでは、じゃあ、その本人がどうだろうかという疑問も私は持つわけです。

ただ、スポーツというのは非常に大事なことでありますから、当然振興していくことについては同じ考えであります。そういう点でいいますと、県のタレント発掘事業というのも、1つのあり方として僕は評価すべきものだろうというふうに考えております。

それから、国のスポーツ立国戦略についてですけれども、これは国のほうで、幅広い、要するに日本という国の中でスポーツというものをどういう形に位置づけて持って行くかということで、幅広い観点から国家としてのあり方、今からのやり方というのを戦略してまとめられたんであるかと思えますし、その中にはやはり、世界に通じるような選手も育てにやいかんと、国家として、国として支援していかんやいかんというものもありましようし、それだけではないと思います。ですから、はっきり出て来た時点で、例えば私ども朝倉市でそれが活用できるものがあれば活用させていただきたいというふうに思っています。

で、2番目が、スポーツマンスカラシップ、これはスポーツに限るということなんでしょうか。それとも、スポーツに限らず学業も含めてということなのか、ちょっとそこあたりがわかりませんが、当然、スカラシップみたいなものは、これは学業も含めてで

すけれども、いわゆる、なかなかまあ、それなりの優秀な能力を持ちながら、家庭的にもいろんなものがあって、まあちょっと、せっかくこれだけの組織があるのに伸ばしちゃうかんと、なかなか家庭の状況等でそういったものを受けられない人を応援しましょうというような側面もあります。だから、それをスポーツに限って、子ども自治体でやるというのがどうなのかという、私自身はそういう考え方を持っております。

それから、市としての今後のスポーツの取り組みですね。今の施設の話が出て来ました。その中で、地域スポーツクラブ、地域におけるスポーツクラブ、これは国のほうももう随分前から話が出てる話なんです。これは、1つはどういうことでできたかといいますと、1つには、やはりスポーツをする人たちが、幅、年齢が幅広くなってきたと。それともう1つは、もう1つの側面としては、特に子どものような地域については、1つの小学校、学校単位での、要するにこれは授業じゃなくて、授業じゃなくて、その後の、例えば部活ですとか、そういったものが学校単位でなかなか、要するに子どもが数が減りましたんで、例えば、ほんと、私は本来は、まあサッカーが一番人数が11人あらにやできん。サッカーしたいけども、いろんなスポーツがあったら、なかなかその学校にサッカーができないと、クラブとして、クラブ違う、部活として。ですから、地域でそういうスポーツクラブ、そりゃあ年齢は幅広いんですけども、があって、地域スポーツクラブというのを、まあその地域、その地域の体育スポーツの中核にしたらどうだという考え方です。これはもう、随分前からそういう考え方というのがあります。ただ、なかなか現実にそういう形になっていかないというのが現状です。その1つには、もちろん施設の問題もありますけれども、先ほど言われました指導者の問題、それに行政がどう絡んでいくかという問題。そこらあたりの整理が、まだなかなかついてないということで、なかなか前に進まないというのが現状であるというふうに思っております。

○議長（柴田裕隆君） 1番北原勝議員。

○1番（北原 勝君） ありがとうございます。私も、このタレント発掘事業のあり方というのは、全くこう悪いというものではなくして、私が思っているのは、朝倉市で独自で何かこう発信というか、スポーツに取り組んでるんだという、朝倉市の旗を振っていただけると、いろんな地区から注目されるんでいいんじゃないかなというふうに思っております。ありがとうございます。

私としては、再度まだくどくなるかもしれませんが、県の事業では、事業だけでは期待はできないと思いますんで、将来の夢のある朝倉市を築こうという志があると思われまますので、独自のシステムということで、スポーツマンスカラシップの創設により人材育成をし、そして育成した人材を、このスポーツ立国戦略という土俵に乗せて、朝倉市から一流の選手を出すという目標を立ててはいかがかなというふうに考えております。

なお、先ほど生涯学習課のほうから答弁がありましたけども、まずできることをやっていただきたい。で、今後においても、この競技力向上のためのメンタルトレーニングとい

うものを、指導者育成ということでスポーツ講演会を継続して取り組みをやっていただきたいというふうに思います。

それでは次に、前回の一般質問のテーマでありました学問教育の分野についてお尋ねいたします。まず、学力向上に向けた取り組みについてですが、朝倉市は福岡県においてどのくらいのレベルにあるのか。また、全国において、どのくらいのレベルなのか、具体的にお願いしたいと思います。さらに、この状況についてはどうお考えであるのかという点と、学問でトップレベルになるに当たっての、何か策があるのかという点で質問させていただきます。

○議長（柴田裕隆君） 教育部長。

○教育部長（藤本具彦君） まず、御質問の学力実態調査等の朝倉市の状況につきまして御説明させていただきます。

平成22年度の全国学力実態調査につきましては、まだ結果が出ておりませんので、昨年度の結果で御説明させていただきます。昨年度につきましては、小学校6年生と中学校3年生で行われておりまして、福岡県は小学校、中学校とも全国平均を下回っております。で、朝倉市の小学校6年生の結果は、全国平均と同程度で、福岡県の平均よりも数ポイント高い結果ということになっております。で、朝倉市の中学校3年生の結果は、全国平均よりも数パーセント高い結果、また一昨年度の全国平均に対します朝倉市の平均と、昨年の全国平均に対する朝倉市の平均と比較では、朝倉市の小学校、中学校は、ともに学力が伸びているというふうなことで認識をいたしているところでございます。

済みません、取り組みの関係ですね。で、学力向上に向けての取り組みの関係でございますが、まず、国や県での学力に対します取り組みでは、国、県におけます結果等の把握等がなされておりますので、調査結果がよかった学校の取り組み事例や授業の改善事例等が、各学校に配付をされているということでございます。

で、朝倉市といたしましては、市としての結果の分析や授業改善の方法につきまして、校長会や教頭会の研修会、教務主任の研修会等の中で方向性を示したりをいたしまして、各学校での推進実施を、推進を図っていくようお願いをいたしているところでございますし、具体的な授業例をもとに指導助言等を行っているようなところでございます。以上でございます。

○議長（柴田裕隆君） 1番北原勝議員。

○1番（北原 勝君） ありがとうございます。朝倉市の現状においては、今答弁があったような状況でありまして、まだまだ底上げを要し、さらなる飛躍をしたほうがよいと考えます。というのは、朝倉市は過疎化が進み、皆さん周知のとおり産業に乏しく、極めて経済基盤が脆弱であるからであります。この状況から脱却するには、学問に力を入れるということがとても重要な要素と思われまます。ただ、前回の答弁において、土曜日学校による学生ボランティアの活用が行われているということでありました。

実は、私がさらに確認したところでは、他の地域においてもさまざまな策が行われております。ここでちょっと幾つか紹介させていただきます。まず、近隣では大刀洗町において、夏塾を開催し、塾の講師を招いて無料塾というものをされております。これは、町として280万円の予算をつけてやっております。2つ目に、この大川市、福岡県の大川市、数学実力日本一ということ掲げて、駆け込み寺ということで、これは大川市の職員が主にやっております。また、3つ目に東京の新宿区においては、ただゼミということで実際に行われております。また、前回も申し上げましたが、杉並区のほうではOB先生の活用による「どてら」ということも行われておりますし、また、県で申し上げますと、秋田県、富山県、長野県においても積極的に活用している状況でありました。

このほかにも、まだまだあると思いますが、他の地域においては、教育に積極的な投資または施策を行っています。そこで、市長にお尋ねしますが、今私が述べた状況についてどうお考えなのか、また何か朝倉市独自の策はあるのかお尋ねします。なお、市長におきましては、マニフェストにおいて小中一貫の検討ということで打ち出してありますが、このことについてのメリットを説明していただければと思います。お願いします。

○議長（柴田裕隆君） 教育部長。

○教育部長（藤本具彦君） 議員御質問のOB先生方のまず活用関係につきましては、現在のところはやっていないというふうなことでございます。で、学力向上に向けた取り組みとしましては、先ほどの取り組みで申しましたように、組織を使って、まあ校長会とか、そういうふうないろんな研修会を使っての方向性を示した中での具体的な取り組み等を行っているわけですが、本年度から、朝倉市としましても、これが直接御回答になるかわかりませんが、子どもたちの学習意欲やチャレンジ精神を育成するために、各校でのさまざまな記録更新者への、教育委員会からのチャレンジ認定書等の交付につきまして考えておるところでございます。以上でございます。

○議長（柴田裕隆君） 市長。

○市長（森田俊介君） 市長は、まず、小中一貫教育、これはメリットがあるのかという話ですが、メリットがあるかどうかを検討するということでもありますから、今まで、なぜ私がこれを打ち出したかといいますと、市として、朝倉市として、今まで小中一貫教育について検討された経緯がないんです。それは、個々に話はありまして、行政として検討した経緯が今までありませんでしたので、純粹に教育的な観点から、小中一貫教育というものが本当に教育上メリットがあるのか、デメリットがあるのか、そんなこときちっと検証して、検証しようということで、検討をしたと。その上で、その上で、それを実施するか、しないかというのは、もちろん私自身が、私だけが決める話じゃございませんけれども、こういう状況ですがということでお示した上で皆々方に判断していただいた中で、実施するかどうかというのを決めていく。その前段階の話です。ですから、今からすぐやるという話じゃございません。ですから、メリットがあるかどうかちゅうのは、この検討

の中で出て来るだろうというふうに思っています。

それから、私、まあ教育について、これは学力に限らずですけれども、やっぱり教育というのは、特に日本のように資源の少ない国、天然資源が少ない国においては、これは昔から非常に大事にされた、教育というものを大事にして来た国だと。それで今の日本があるんだろうと思います。「坂の上の雲」にしてもそうです。あの兄弟の話。ですから、これはいつの時代になっても変わらないというふうに思います。

で、私は、その中で、まずそれを前提にしてお話しますと、市長にとって教育、どう考えるかということですけども、まず学力というのは当然の話です、これはもう前提です。で、その中で、特に最近思いますのは、書いておりますのは、やはり自分たちの生まれ育ったふるさとに誇りを持てるような子どもたちを育てなきゃならん。そのことが、ひいては、いわゆる日本という国に対する、まあ愛国心という言い方をすると「お前、右翼じゃないか」と言う人もいらっしゃるかもしれませんが、そういったものを育てるんだろうというふうに思うんです。

それともう1つは、規範意識ですね。まあ、横文字でいうと「パブリックマインド」というそうですけれども、どうも最近の子どもたちには規範意識というものに多少欠けているきらいがあると。そういったものも合わせて、やはり教育の中で、義務教育の中でしっかり持っていただくような教育をすると。そうすることによって、心身とも健康で地域社会ですとか、国ですとか、国際社会に貢献できるような子どもたちを育てていくというのが私の考え方であります。

○議長（柴田裕隆君） 1番北原勝議員。

○1番（北原 勝君） ありがとうございます。教育に関しては、朝倉市の最重要問題であり、最も優先すべきものだと私は思っております。できるものであれば、既存のノウハウ等を積極的に活用し、学問においては活気あるまちづくりを推進していただきたいと思っております。

話は若干横道にそれますが、物事には当然費用対効果という概念が必要であります、私見としましては、教育という分野においては、費用対効果という概念はマッチングしないような気がします。というのも、教育というのは、対策を打って即効性があるものは少ないからであります。しかしながら、長期的に見ても、見て行くことで、朝倉市の底上げ、レベルアップにつながるのかなと思います。ですから、教育分野に関しては、費用対効果という概念で予算組みをしては問題なのかなというふうにも思っております。

以上のことから、活気ある朝倉市をつくり上げる第一歩としては、絶対的に教育のレベルアップが必要不可欠であり、平成23年度の予算において積極的な教育への投資をしていただきたいというふうに思います。

次に、次に移ります。次に、通告書においては、海外留学、山村留学、漁村留学となっておりますが、特に海外留学については、その目的等が、山村、漁村留学と異なるために、

2つに分けて質問させていただきます。まずは、海外留学について。海外留学の促進について、どのような取り組みがなされているのか質問をいたします。

○議長（柴田裕隆君） 教育部長。

○教育部長（藤本具彦君） 海外留学の取り組みについてのお尋ねでございますが、まず県関係につきましては、海外留学につきましては、青少年アンビシャス運動の事業の1つとしまして「青少年アンビシャスの翼」が取り組まれているところでございます。で、これは13歳から17歳の青少年に、アメリカ、イギリスのサマーキャンプ等に派遣をしまして、2週間程度でございますけども、外国の青少年と寝食をともにしながらの交流、切磋琢磨を通じての国際力を身につけた、20世紀を担うたくましい青少年の育成をする事業ということで実施をされているところでございます。で、これにつきましては、お知らせ等、広報等につきましては、高校やインターネット、広報紙等を通じて行われているところでございます。

で、市の取り組みといたしましては、平成19年度まででございますが、青少年海外派遣事業が行われているところでございます。で、現在は行われていないということでございます。以上でございます。

○議長（柴田裕隆君） 1番北原勝議員。

○1番（北原 勝君） ありがとうございます。私の確認したところでは、県や国の事業のほうでは、今取り組みについてわかりましたけども、朝倉市においては、平成19年度まではちょっと行っていたということ聞きまして、20年度において海外留学制度はやめてしまったという旨のことを聞きまして、この朝倉市においてこの海外留学制度を中止した理由について、ちょっと答弁をお願いしたいと思います。

○議長（柴田裕隆君） 総務部長。

○総務部長（樋口信尋君） この事業につきましては、合併前の市町で実施されていたものを引き継ぎ、新市になっても、この19年度まで実施を行いました。で、旧甘木市時代にあつては、これ、平成12年度が一番最高の48人の応募であったものが、平成19年度には、市内全体で8人の応募しかございませんでした。で、この応募者が激減しましたために行っていない状況でございます。

○議長（柴田裕隆君） 1番北原勝議員。

○1番（北原 勝君） ありがとうございます。この海外留学制度というのは、将来の活気ある朝倉市を目指すためには、また国際人の育成という観点からも、海外留学というものは不可欠なものであろうというふうに考えております。

余談になりますけども、幕末以降、同じ九州に位置する薩摩藩が、なぜ政府の中心に位置し活躍できたかという、薩摩藩は鹿児島中央駅に銅像がありますけども、鎖国中である1865年、国禁を破って、内密に海外派遣を行っておりました。そのため、新しい文化を持ち帰り広めたそうであります。その結果、数々の著名人を薩摩藩からは排出したそうで

あります。

こういうことから、海外留学については、海外交流、海外の文化を理解することで、国際人の育成にもなります。そして、海外留学の促進については、若いときに海外に目を向けるということで、世界の中の朝倉、もしくは世界の中の日本という考え方を持つようになるのかというふうに思います。

日本と海外では、宗教、人種、文化、さまざまな違いがあります。この違いというものを、早い時期から学ぶことは大変重要なことだと思っております。例えば、夏休み等を利用して1カ月、もしくは2カ月くらいを単位として、海外の生活を体験することで、国際人としての第一歩を手助けするものになるのかなというふうに思います。また、副次的には、その留学者が周りの人に体験談を語ることで周辺に与える影響があり、周辺の人への興味づくり、情報提供という観点からも有意義なものだと思います。

私の知人が学生時代にバックパックをしょって、各国、各地域のユースホステルを宿泊先として、ヨーロッパ一周旅行をした話を聞きました。その知人は、当時、歴史、宗教、文化等には無頓着であったと言っておりました。しかしながら、帰国後、ヨーロッパの歴史を勉強したり、商業と宗教の関係について勉強したり、各国の国民性、芸術など興味の範囲、また自分の人生観というものに深く影響したと言っていました。

今、申し上げたように、海外留学の促進をすることで、教育に関するさまざまなシナジーを生むことになると思います。また、これらを体験することで、生きる知恵というものがはぐくまれるのかなというふうに思います。

それでは、この海外留学の促進について、どのように市長はお考えなのか質問します。また、現段階において、海外留学制度の導入は考えているか、いないか、お答えをお願いします。

○議長（柴田裕隆君） 総務部長。

○総務部長（樋口信尋君） これ、教育部長のほうがちょっとお答えしましたけど、現在は、県の青少年海外派遣事業として「青少年アンビシャスの翼」、それから財団法人の「国際青少年研修協会の夏休みの海外派遣事業」などがあります。

で、県などで同類の事業が実施されておりますことから、先ほど申しましたように、応募者も少なくなっておるという状況もありましたもので、現在においては、この市としてのこの再開を見合わせている状況でございます。

○議長（柴田裕隆君） 1番北原勝議員。

○1番（北原 勝君） ありがとうございます。まあ、県や国の事業はわかったんですけども、ぜひ、市としてこの海外留学システムをさらに発展させて復活していただきたいというふうに思っております。

次に移らせていただきます。次の質問は、前回の質問の継続というふうになりますけども、私の考えるこの山村、漁村留学の促進ですが、朝倉市としては受け入れ側としてとら

えるものではなく、他の市町村で既に存在する事業を利用するというものであります。そうすれば、受け入れ側としての懸念事項は払拭できるのではないかと思います。

山村、漁村留学の受け入れ側としての考え方というのは、既にもう古い考え方かと思えます。今後は、田舎であるこの朝倉市が、別の田舎であるほかの地域を見ることで、教育に関するさまざまなシナジーを生むことになると思います。要するに、朝倉市として、積極的に他の市町村に留学させるほうが得策ではないだろうかということが言いたいのです。

私は、将来の活気ある朝倉市を目指すためには、山村、漁村留学というものは不可欠なものだと思っております。ほかの地域にある山村、漁村留学制度を活用することで、積極的に推進するシステムづくりを行うことで、また言い換えれば、子どもへの投資をすることにより教育水準を上げることが可能となり、そして、人としての協調性をはぐくむことでバランス感覚の取れた人間形成ができるのかなと思っております。そのことで、ひいては将来の朝倉市に明るい展望が出て来るのではと確信しております。ぜひ、積極的に取り組んでほしいと思っております。市長にお尋ねします。山村、漁村留学の促進についてのお考えをお願いします。

○議長（柴田裕隆君） 教育部長。

○教育部長（藤本具彦君） 議員の言われております山村、漁村留学等を通じて人材を育成すると、将来を担う朝倉市の子どもたちを育成するということが大事なことだろうと思えますけれども、これにつきましては、市でやるというよりも、1つは子どもさんとか御家庭の考え方もあるでしょうし、そういったことも含めまして考えていく必要があると思えますし、制度といたしましては、先ほども申しました、県なり、財団等の留学制度がありますので、こういったものも活用しながら進めていくといたしますか、取り組んでいくことが大事だろうと思えますので、そういった意味での、現段階ではそういった制度を活用しての育成といたしますか、推進を図っていきたいというような考え方でございますので、制度、市として教育委員会としてやっていくということにつきましては、現時点では難しいというふうに考えているところでございます。

○議長（柴田裕隆君） 1番北原勝議員。

○1番（北原 勝君） ぜひ、今までの山村、漁村留学の考え方にとらわれず、これからは、この朝倉市からニュースタイルの山村、漁村留学推進システムを創設していただきたいなというふうに思っております。

最後になりますが、スカラシップについてお尋ねします。現在のスカラシップの利用状況についてお尋ねします。（「ないっちゃろう」と呼ぶ者あり）

○議長（柴田裕隆君） 教育部長。

○教育部長（藤本具彦君） 奨学金制度の関係でございましてけれども、奨学金制度といたしましては、市の奨学金、それから福岡県の教育文化奨学財団が行っております奨学金、

日本学生支援機構が行っております奨学金等がございます。

で、朝倉市が行っております奨学金につきましては、その対象を高等学校、高等専門学校、短期大学、大学、大学院に在学しておられる学生さんを対象に実施をいたしておるところでございます。以上でございます。

○議長（柴田裕隆君） 1番北原勝議員。

○1番（北原 勝君） ありがとうございます。朝倉市と福岡県のスカラシップと申しますか、奨学金制度の答弁がありました。この制度は大変よいシステムだというふうに私も思っております。一方で、本来の意味であるスカラシップと申しますか、優秀な人材に対しての投資も重要な要素だと思います。これからは、優秀な人材に対してのスカラシップというものに着目して話を進めさせていただきたいと思っております。

確かに、県、国の制度があり、その活用のほうが現実的であるとの見方もあるかと思っておりますが、現状として、朝倉市民がどのくらいこのスカラシップが活用できているのかと考えますと、非常にハードルが高く、活用困難な状況が色濃いのではなかろうかというふうに思います。それには、学問教育の底上げがとても重要であります。

そこで、朝倉市民だけが活用できるシステムがあることで、そのハードルが下がり、だれでも努力すれば活用のチャンスが広がるのであります。そうすれば、おのずと個々人のレベルアップということになり、そういう土壌があることで、県、国、そのほかのスカラシップの活用の意識もついてくるのではなかろうかと思っております。

要するに、現状としては、県、国などのレベルにおいて、そのような制度があるにもかかわらず、非常に狭き門であることから、利用者はかなり限定的になっているのかなというふうに思います。まさしく、絵にかいたもちであり、非常に憂うべく状況であるかと思っております。教育という大きな柱というのは、将来の朝倉市の根幹となるものであります。

ここで、朝倉市独自のものとして、学問版スカラシップ、スポーツ版スカラシップの創設によって、創設について、強く要望したいと思います。スカラシップと一言で言ってもイメージがわからないかなと思っておりますので申し上げますと、まず、学問版スカラシップというのは、例えば、現在朝倉市に6つの中学校があります。この各中学校の上位3人を、まあ、これ1人でも2人でもいいんですけども、例えば上位3人を2週間から1カ月くらいの期間において海外留学をさせるというものであります。

そして、スポーツ版スカラシップというイメージを申し上げますと、例えば野球であれば強化選手18名くらいを各団体から選抜し、週に1回、もしくは月に1回、合同練習を行うというものであります。当然、スカラシップですから、この費用は公において負担するというものであります。

それでは、教育長にお尋ねしたいと思います。朝倉市として、スカラシップの導入についてどのようなお考えがあるのか。また、今後の取り組みにおいて、何か秘策はあるのか答弁をお願いします。

○議長（柴田裕隆君） 教育長。

○教育長（宮崎成光君） スカラシップについて、詳しくいろんなことを調べて。

○議長（柴田裕隆君） 教育長、マイクをつけてください。

○教育長（宮崎成光君） 御提案いただいて、ありがとうございます。現在のところ、能力の高い生徒さん方は、特待生という制度の中で、それぞれのところで、それを利用しながら、その特徴を伸ばしていただいているのが現実だと思っております。今、学校教育で取り組んでおります、子どもたちの関係は、まあ人間関係を大事にしながらいろいろなことを取り組もうというふうな形で取り組んでいますので、一部の子どもさんだけを抜き出してどうこうということよりも、全体の子どものさんを高めていくという方向で、教育委員会としては現段階考えています。今、おっしゃってあります新しい方向については、今後勉強していきたいと思えます。

○議長（柴田裕隆君） 総務部長。

○総務部長（樋口信尋君） ちょっと時間ありませんが、先ほど私が答弁の中で、ちょっと誤解を招くような、ちょっと発言を、答弁をいたしました。で、平成12年度において最高48人の応募であったものが、平成19年度では「市内全体」というのは、これは旧甘木市内での全体の8名ということです。済いません。大変申しわけありませんでした。

○議長（柴田裕隆君） 1番北原勝議員。

○1番（北原 勝君） 時間がもうありませんけれども、朝倉市独自で、この学問版、そしてスポーツ版のスカラシップにより、朝倉市が日本、もしくは世界から注目されれば、さまざまな効果が期待でき、さらに朝倉市が教育県をうたい文句にすることで、さまざまな発展が可能になるのかなというふうに考えております。そうすれば、おのずと朝倉市がよくなると考えております。今後も教育というテーマについて、深くかつ積極的に研究し、知恵を出し合いながら、発展的解決を見出していきたいというふうに思っております。

これで私からの一般質問を終わります。ありがとうございました。

○議長（柴田裕隆君） 1番北原勝議員の質問は終わりました。

以上で、通告による一般質問は終わりました。これにて一般質問を終了いたします。

10分間休憩いたします。

午後3時8分休憩